みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

学会展望 (1990年1月～12月) : 民族・文化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5632

民族・文化　この一年間の特色の一つは，1989年に刊行された『文化地理学』（大島襄二・浮田典良・佐々木高明編著）に対する反応が随所に現れたことであろう。そのなかで注目したいのが渡辺欣雄の次のような結語である。

……文化地理学こそは，「あくまでも地理学でなければならない」などという地理学固有の呪縛を解き放ち，自由な発展を大いに期待できると思う。「これが文化人類学だ」などとわざわざ断わるまでもなく，文化人類学研究が存在する無節操さを，文化地理学者にだけは学べと言いたい。諸学の母たるもの，子供［文化人類学］のすべてを知らずして親たりえないだろう。（『民博通信』50）

かつてあらゆる人文科学の母胎であった地理学には，それゆえに喪失の記憶が強く刻まれており，いささか過剰な防衛本能が培われている。しかし，境界を引こうとする自己峻別化の態度は，領域の狭小化にほかならず，学問の発展につながるとは思われない。とりわけ本質的に多様な「文化」を扱う分野では過剰な防衛本能によって失われるものが大きいであろう。

愛情のある檄文を書いた渡辺自身は，『風水思想と東アジア』（人文書院）を上梓した。風水思想はいかにも地理学的なトピックであり，現に大城直樹「亜熱帯島嶼の集落立地と生活様式」（人地42―3）でも重要な意味をもっているが，もはや地理学の専売特許ではありえない。渡辺の著書は，はやくも『民族学研究』の書評（55―3，瀬川昌久）にとりあげられて，「風水」は学術的な意味での流行語になる，と予言されている。地理学にとどまらないことによって，分析概念としての有効性が証明されているかのようである。

1955年の Conklin の方名研究は，たとえば中村繁之「通称地名にみる土地区分」（法政人類学43・44）のように，地理学において広い裾野をもって定着した。この方面の研究を理論的にまとめた実証研究として，松井　健『琉球のニュー・エスノグラフィー』（1989，人文書院）も見逃せない。一貫して認識人類学の立場から書かれているが，環境とその認知をめぐる民俗分類および空間分類が中心に扱われているという点で，地理学として無視できまい。隣接した内容をもつ例として，先述の大城がある。聖俗の二項対立や二元論などの既知の常識を結論とするのではなく出発点にすえてこれを克服していくことは，学問の分野を問わない共通の課題であり，だからこそ諸学の研究を見過ごすことはできないのである。この課題に関連して，八木康幸「葬式道・御旅道―村の道の空間論ノート―」（関西学院史学23）や，浜谷正人「散居村の社会と生活―　<宮村>の空間論から」（砺波散村地域研究紀要８）が新しい展望をひらいていると思われる。さらに仲村弥秀『神と村』（梟社）は新版が出た。

以上のような空間論および空間認識論から文化の解読をめざした地域研究は，都市に対しても試みられている。応地利明 'The "Ideal" Hindu City of Ancient India as Described in the Arthasastra and the Urban Planning of Jaipur"（East Asian Cultural Studies 29）や，建

築学や工学の立場から『那覇の空間構造—沖縄らしさを求めて—』（1989，沖縄タイムス社），垂水稔『結界の構造』（名著出版）があった。森栗茂一『河原町の民俗地理論』（弘文堂），杉本尚次『ベースボール・シティ—スタジアムにみる日米比較文化—』（福武書店）もまた，都市における空間論からの文化の解読として位置づけることができよう。

このように，空間から文化を考察するというきわめて地理学的な研究は，村落を対象にせよ都市を対象にせよ，他分野と共存している。とくに日本のなかの異文化ともいうべき南西諸島の地域研究においては，他分野と大いに競合している。まさにボーダレス・ワールドといえよう。

この一年間の特筆すべき活動としては人文地理学会大会での特別研究発表がある。小林茂は「生業活動への文化地理学的アプローチ」で，サウアー以来いかに文化地理学が生業活動の分析に貢献してきたかを丹念にあとづけた。たしかに本年だけに限ってみても，以下のように生業活動に関連する業績がめだつ。

藤田佳久「愛知県豊根村の近世における林野利用」（愛知大総合郷土研究所紀要）など，茨口善美の継続的な研究 'Rural Comunity and Agriculture in Bangladesh'（地域学研究３），応地利明 'Les tecniques dela culture de mil au Mali'（"BOUCLE DU NIGER" 東京外大ＡＡ研），田畑久夫「照葉樹林文化論と雲貴高原東部の少数民族の生業形態」（兵庫地理35）など，田和正孝「台湾北西部における沿岸漁場の利用」（西日本漁業経済論集31），池谷和信「マタギ集落・三面における山利用の生態史」（科研報告書），小林茂「近世奄美諸島の自然災害(2)」（九州大・歴史学・地理学年報14）などがある。また許　衛東「中国海南島における農家の変貌と地域分化」（人地42—３）は生業活動の観点からエスニシティに言及し，河原典史「漁村における家屋の機能変化とその要因」（人地42—２）も漁業の変容を家屋に投影させて読み取る。

やはり，生業をめぐる研究が文化地理学の主流に見える。しかし，生業活動の重視を強調することが本当に文化地理学として妥当であろうか。また文化地理学の未来展望につながるであろうか。大会では，文化地理学における「文化」の領域を生業に限定して，みずからを束縛することになっていないかという主旨の質問があったことを重視したい。

研究史という手順上の必要からサウアーにまで遡ることはありうる。しかし，偉大な父に圧倒されていると柳田民俗学の轍をふむ危険性もあろう。そもそも，偉大な父サウアーと生業活動との共通集合は『農業の起源』であり，その業績はむしろ隣接分野に移行して継承されている。松井　健『セミ・ドメスティケイション—農耕と遊牧の起源再考—』（1989）に対する反応は，ようやく『地理学評論』（64—２，1991，池谷和信）に現れている。こうした状況から判断すれば，生業活動に強いことを理由として文化地理学を隣接諸学から峻別して評価することはできないであろう。

比較的得意なはずの生業の部門や，固有であると信じてきた空間の視点においてさえも隣接諸学との競合があるからといって，悲嘆にくれる必要はない。地理学は狭まって残り物になったのではなく，地理学が広がったとみなせばよいのである。悲嘆すべきは，拡散したものに対してフォローすることをやめたとき，本当に残り屑になることである。

もし，地理学に他の学問と積極的にわたりあう力があるとすれば，そのエネルギー源は，文化地理学をこえてその背後にある，地理学全体で共用されてきた分析概念や研究視点などの資産ではないだろうか。だとすれば，地理学のなかで文化地理学を限定することも，文化地理学のなかで文化を限定するのも，あきらかに不利

であろう。

文化地理学が他の地理分野と交流している例として，たとえば『変貌するアジア』（古今書院）にある瀬川真平「ジャカルタとカンポンの住民」や熊谷圭知「ジャカルタの『二重構造』とその変容」，『現代の地理学』（大明堂）のなかの溝口常俊「第三世界論」，『地理学講座・環境と生態』（古今書院）がある。また，文化を生業に限定していない例としては宗教をあつかう一群が目につく。岩田慶治の『からだ・こころ・たましい』（ポプラ社）や『花の宇宙誌』（青土社）など，長野　覚「日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然護持（その２）」（駒沢地理26），小長谷有紀「モンゴルにおけるアンダイ舞踏」（八木裕子編『女性と音楽』東京書籍，所収）などである。さらにまた，学史に隣接諸学を積極的にとりこんでいるのは，山野正彦「レヴィ＝ブリュールの『融即』に関するノート」（人文研究42―８分冊）である。

隣接諸学を無視できないのは，文化地理学に限ったことではない。ただし文化地理学の場合，隣接諸学のなかで人類学（民族学）と競合する。人類学の比較的古い世代の仕事たとえば大林太良『東と西，海と山』（小学館）や梅棹忠夫『モンゴル研究』（中央公論社）を見ると，きわめて地理学的な視点がうかがわれる。両分野のあいだには，研究内容の差以上の活力の差がめだつというべきではないだろうか。

モンゴルを対象とする筆者が注目している地域に限っても，高山龍三『失われたチベット人の世界』（日中出版），鴨川和子『トゥワー民族』（晩聲社），レベジェフら『カムチャトカにトナカイを追う』（平凡社），葛野浩昭『トナカイの社会誌』（河合出版）などの民族誌が刊行された。牧畜を対象としている筆者が目くばりすべきアフリカでは，京大アフリカ地域研究センターのモノグラフだけでも年間相当な数の論文にのぼる。国立民族学博物館研究報告別冊は，11号『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析』，12号『アフリカ民族技術の伝統と変容』であった。

雑誌『地理』に紹介される書籍には，ますます地理学以外の分野のものが増えるであろうことは否めない。そうした目くばりを地理学の衰退とみて抵抗する人が一人でも減り，地理学の発展とみて受容する人が一人でも増えることが，地理学の未来を明るくする。

学問は進化しなければ，その存在理由を失う。近年の分子生物学は，種をこえて遺伝子をやりとりするヴィールスによって進化がもたらされていることを明らかにしている。この真理のひそみにならえば，文化地理学も種をこえて遺伝子をやりとりしあって進化すべきである。地理学の中でこれぞ地理学だと安逸をむさぼれる分野があるとすれば（あるとは筆者には思われないが），そこは遺伝子がきわめて安定したところであり，そんなところには進化もあるまい。

（小長谷　有紀）